
墮ちかけの天使

津田花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堕ちかけの天使

【Nコード】

N6372E

【作者名】

津田花

【あらすじ】

その天使は天使であって天使ではない。人間のように悪魔のような天使。

*** 1 * 天使は神へ使役する（前書き）**

連載ですが、短編のつもりで書きました。
そんなに長い話ではないです。

*** 1 * 天使は神へ使役する**

なぜ神は干渉するのか。

この世には人間だけじゃなく、鳥や魚や木や花……様々なものが存在する。

それなのに何故人間だけに神が干渉するのか。

昔はよくそんなことを考えていたな。

煙草をふかしながらふと思い出す。

「フレリエル！またそのような人間の真似事を！！」

奴が来たな、うるさい奴が。

俺はこいつが嫌いだ。

「良いだろ。俺たちには害は全く無い。」

俺がこいつを一服する理由は、分かるだろ？
人間が初めてこいつに挑戦するのと同じ様な動機だ。

「フレリエル！使役もせず下界に入り浸り、少し人間になじみすぎです。そのような振る舞いを続ければ天界から追放しますよ？」

うるせえな。

俺が神から貰った名を気安く何度も呼ぶな。

「ミカエル、天界での立場が神に近いからとは言え、貴様は神ではない。そうだろ？」

えらそうな奴が一瞬ひるむ。

これ以上奴の顔を視界に入れるのはごめんだ。
とっとと下界の仕事に行くか。

「じゃあな大天使。」

”墜ち損ない”と言う声が背中当たったが、大天使様がそんなこと言うはずがないので神には黙っておいてやろう。

優しいだろ？

それは俺が天使だからだ。

下界へ続くゲートを作ると、門を開ける。

天界はお前らの空にある訳じゃないからな。

「さて、初仕事でもするか……。」

俺は携帯灰皿という人間の発明品に燃えかすをねじ込んだ。

そのときはまだ、俺は何も知らなかった。

*** 1 * 天使は神へ使役する（後書き）**

どうもありがとうございました。

またのお越しをお待ちしております。 : -) *

* 2 * 欲望こそ人間

” いざ来たりませ、異邦人の救い主よ。”

とは良く言ったもんだ。

俺は今、とある教会のミサを聞いている。

歌は好きだが、詩は嫌いだ。

人間の声が奏でる音色は美しい。

それはまるで、教会の出窓に座っている俺をかすめていく、この風。

だが、内面の汚さや欲は、言葉として紡がれてしまっている。

それはまるで……、まるで……。

悪いが俺が知る中でそれほど醜い物がない。

「全く、寒気がする。」

俺は教会とか聖地とか、人間が勝手に作り上げた神をあがめる場所が大嫌いだ。

あんな物欲の塊だ。

「どうされました？」

やばい、シスターだ！

「どこへ行くのです！？体調が優れないのでしょうか？」

天使に体調なんてあるか！

「ほつといてくれ。」

その瞬間ある言葉が頭をよぎった。

”下界で最初に自分に触れた人間が契約者。”

神が暇つぶしの為に作り上げた天使の掟だ。
俺は自分の体を人間に触れさせた事がない。
今、この瞬間までそうだった。

「待ちなさい。そのような物を召し上がっているから体調が優れないのですよ。」

初めての契約者は、存在しない様な慈悲深い神を敬い、奉るシスター！。

とんだ妄想野郎だぜ。

シスターの手に奪われた煙草が、名残惜しそうに煙を泳がす。
こいつの手が意外にも暖かく、俺の心は落ち着かなかった。

*** 2 * 欲望こそ人間（後書き）**

ありがとうございます。

ご意見、感想などがあればお願いします。

他の投稿した話でオススメは、「まほうつかい」と「つき」と「名も無きもの」ですかね？

*** 3 * 愛は偉大、恋は痛い**

恋という物は理解できない。

愛は知っている。

与えるものだ。

慈悲と言っても良いだろう。

だが恋は経験したことがない。

俺が考えるに、恋とは奪うものだ。

「神父様……わたし、貴族との結婚はやっぱり無理です。彼に申し訳なくて……。」

俺は神父じゃない。

ましてや人間でもない。

まあ、その辺は良しとしよう。

俺がふざけて神父の格好で懺悔室にいるのは紛れもない事だからな。

「先日婚約した話はどうするんだ？」

「断ります。」

こいつは面白い。

婚約を決めたときは幼なじみの事などあきらめたとほざいていた奴が、今度はそいつのために家を捨てるのか？

「あきらめろ。前言撤回は無しだ。」

なぜか笑いがこみ上げた。

それは自分が適切な助言をしていると自惚れていたのか、花嫁をあざ笑ったのかは分からない。

だが、生きてもせいぜい100年程度の生き物だ。
所詮人間に永遠の愛など存在しない。

「あきらめて、将来を安泰に過ごせる相手と結ばれることだな。」

女は何もいわずに懺悔室を後にした。

後でその話をシスターに自慢げに話すと、何故か叱られた。
泣きそうな瞳で俺を散々責めた後、選りすぐった言葉で俺をけなした。

”無神経”と。

苛立ちとは違う痛みが俺の心をかけ巡った。
だが、今でもこの助言に後悔は無い。

* 4 * 悪魔は求める

俺の下界での仕事は、人間に正しい教えを与えずに神の興味をそそるシナリオを構成する事。

それは、紛れもなく天使だ。

だが天使の中で、最も悪魔に近い。

なぜなら人の心が読めないからだ。

おまえ達は知らないだろう。

悪魔は心が読めなくせに、読めるふりをして近づき、真理とは無関係な善意を振りかざす。

ただの自己満足。

奴らは神から必要とされなくなった悲しさのあまり、人間に自分を必要としてもらいたいだけの寂しい堕天使だ。

そう考えると奴らは人間に近いな。

「フレル、去年あなたが諭した方からお礼が届きましたよ。」

シスターが優しく差し出した物は花束だった。

「いらん。」

俺の体から、煙草の煙と共に言葉が出て行った。
俺は元々花には興味がない。
俺の興味をそそる対象は人間だけだ。

「では、入り口に飾っておきますね。」

「勝手にしろ。」

シスターはトコトコと扉へ向かう。
揺れる服が眠気を誘う。
シスターほどつまらん人間はいないな。
こいつの元へ相談に来る奴等が、せめてもの暇つぶしだ。
この1年で、こいつをあしらうのも慣れてきたし。

「感心しました。あなたがあの花嫁におっしゃったこと。」

シスターがまた服を揺らしながら俺の元へ近づく。
あの花嫁は面白かった。

「俺は諦めると言ったはずだ。俺の意見を聴きに來たのだから受け入れるのが道理だろう?」

結局婚約破棄して幼なじみと結婚するのなら、初めから他人の意見などきくな。

自分にしっかりとした意志があるなら他人の意見を耳に入れること事態が無駄だ。

「きつと背中を押してほしかったのでしょね。」

トスンと俺の隣にシスターが腰を下ろす。
ふいに、あの時のシスターの顔を思い出した。

「私は人々の言葉を受け入れてばかりでしたが、彼らは突き放されることで前に進むことが出来る時もあるのですね。」

人間はさっぱり分からん。
だが、そこがまた面白い。

「何を笑ってるんです?」

「おまえには関係の無いことだ。」

シスターが小さな笑い声を奏でた。

「あの、そろそろ煙草やめたほうが宜しいのでは？ 体に毒よ？」

シスターは本当に詰まらん。

*** 4 * 悪魔は求める（後書き）**

フレリエルは天使のくせになかなか素直じゃないですね。
暖かく見守ってあげて下さい。

ありがとうございました

*** 5 *** 人間は自由に生きる（前書き）

最終話です。

*** 5 * 人間は自由に生きる**

なぜ天使が人間の姿をしているのかって？

それは違うな。

天使が人間を真似るはずがない。

人間を真似る天使など、ただの変わり者だ。

俺みたいにな。

人間が進化の過程で天使の姿を望んだんだ。

そのことが神にとって興味をそそったのは言うまでもないな。

「あなたは天使だったのですね!？」

嫌な奴が来た。

「何のことだ？」

煙草の煙でシスターの顔が霞んで見えた。

「今一瞬、あなたの背中に羽が見えましたわ。」

この女時々妙な事を言う。

天使に羽など無い。

もし、この喜々とした表情を見たのが神なら、自分が天使だと名乗るに違いない。

あいつは面白いことを望んでいるからな。

「勝手にほざいてろ。」

ついにおかしくなつて幻覚でも見たか？

手元の煙草を再び口に運ぶ。

足は忌々しい聖堂の扉へと運ぶ。

「あなたは初めてお会いした時から不思議な方でした。」

俺にとって人間ほど不思議な物はない。

こいつは俺に”恋”をしているらしい。

”愛”なら分かるが”恋”という物はさっぱり分からん。

契約者が”恋”をしたら契約は打ち切られる、それが天使の掟だ。そろそろこのシスターとも別れ時だな。

「行かないで下さい！」

シスターの言葉が何故が俺の心を貫いた。

「は？」

振り返りはしない。

俺に未練や情けなどと言うものはないからな。

「このままあなたが消えていなくなる様な気がします。」

シスターの上品な叫び声が痛い。
俺の口から出ていく言葉が痛い。

「その通りだな。」

俺は大嫌いな教会の扉を天界へつなげ、シスターの元を去った。

これが俺の初仕事だった。

何事も初心は忘れてはいけないものだ。

だが、俺はこの痛みを忘れてしまいたい。

*** 5 * 人間は自由に生きる（後書き）**

ありがとうございました。

彼にとつて、この初仕事がいつの日かハッピーエンドだったと言える日が来ることを祈りましょうね。

さて、話は終わりましたがフレリエルの物語は終わっていません。もちろん続編を書くという意味ではありません。

どんな物語にも、始まりがあれば終わりがあるように、この物語はここで終了します。

ですが、彼らは消えるのではなく、生き続け、きっと誰も知らない物語を紡いでいますよ。

そのことをお忘れなく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6372e/>

堕ちかけの天使

2010年10月15日18時59分発行